

感覚と再現

『感情教育』における反復生成のメカニズム

高倉 康行

序

フロベールの長編第三作『感情教育』の世界に顕著な特徴は、緩やかな河の流れにも似た一種停滞した時間¹、およびそうした印象を生み出す原因の一つである、類似の事柄の反復という構造ではなかろうか。事実、これまで多くの批評家が、この小説に繰り返し見られる現象について言及してきた²。主人公フレデリック・モローとアルヌー夫人との恋に話を限ってみても、彼は愛する人に対して思うように積極的になれず、二人の恋愛はなかなか進展しない。こうした「活力を奪われた愛³」の物語にふさわしく、小説では似たような要素がたびたび提示される。だが、主人公の感情生活に見られるこのような特性は、どのような原理に基づいて生じているのだろうか。本論では、フレデリックの愛における反復の現象とその原因について、彼の身体感覚という側面から光を当てて、分析してみようと思う。

感覚

フランス二月革命前後の、激動の時代を生きた者として描かれるフレデリックは、時の流れに翻弄され、若いときに抱いた夢も次第に潰え去り、最後は虚しく歳を重ねてゆく。そのような運命の濁流に、抗し難く押し流されて

¹ アルベール・ティボーデは、『感情教育』に特有の、時間の持続とそのリズムとを、流れる水のイメージをもって論じている。Albert Thibaudet, *Gustave Flaubert*, Gallimard, coll. « Tel », 1992, pp. 151-154.

² イヴァン・ルクレールは、『感情教育』についての概説書の中で、幾人かの論者の考察に言及しつつ、この小説の反復構造を簡潔に提示してくれている。Yvan Leclerc, *Gustave Flaubert « L'Éducation sentimentale »*, PUF, Études littéraires, 1997, pp. 57-61.

³ Gustave Flaubert, *Correspondance*, édition de Jean Bruneau, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. III, 1991, p. 409.

ゆく人物にふさわしく、彼は多感で繊細な青年であった。すなわち、主人公の心は移ろいやすく、些細なことですぐに変わってしまう。実際、小説冒頭からして既に、彼の心の不安定さは以下のように明らかである。

一匹の犬が、遠方の農場で吠え始めた。彼は、理由のない不安にとらえられ、身震いした。

イジドールが追いつくと、彼は自分で手綱をとるために、馭者台に座った。弱気な心は消え去っていた。彼は、アルヌーの家は何としてでも入ってゆき、彼らと交際しようと、しっかり決心していた⁴。(56)

故郷ノジャンへ戻る旅の船上で、アルヌー夫人と劇的な出会いを遂げたばかりのフレデリックだが、その心理は、ふとしたはずみで、このように不安と希望の間を揺れ動く。彼自身、「理由のない」としか思えないようなこの心の揺らぎこそ、感じやすい十八歳の主人公の特徴である。そして、この後、フレデリックとその友人デローリエのコレージュ時代が、過去に遡行して語られるとき、我々の目をひきつける事実もやはり、この心の激しい動きなのだ。

二人のこうした希望の高揚には、懐疑が引き続くのだった。口数の多い陽気さの発作の後、彼らは深い沈黙に陥っていった。(61)

期待と恐れ、いわば躁鬱のような状態を繰り返すというフレデリックの心の揺れは、その生の始原から、彼の内に刻み込まれているリズムのようなものと言えよう。だが、それにしてもこうした内的動揺は、実人生においても見受けられる、あの移り気な性格と言われるものの、単なる反映にすぎないのだろうか。確かに、ここでデローリエにも、同じ特徴が付与されていることから分かるように、この場面は、現実に存在しうる多少情緒の不安定な青年の、典型像の一つが描かれているのだと言えなくはない。しかし、少なくともフレデリックに限って言えば、彼の内面の動きは、その過剰さ、あるいはその特異さ故に、単なる現実にあろうる心情の類型の一つには収まりがたいものがある。つまり、彼の心理の運動は、周囲のもの動きと、異常なまでに密接な関係を取り結ぶことになるのである。

⁴ Gustave Flaubert, *L'Éducation sentimentale*, GF-Flammarion, 1985, édition établie par Claudine Gothot-Mersch. 以下、本論文で引用する『感情教育』のテキストは、すべてこの版を典拠とし、引用後に頁数を括弧内に示す。

「ずいぶん大げさだな！」フレデリックはおずおずした声で言った。

「何だって！そうさ！どうせ大げさだよ！」芸術家は、テーブルを拳固でごつんと叩きながら大声で言った。

この荒っぽい挙動のために、若い男は揺るぎない気持ちになった。確かにもっと親切に振舞うことはできるだろう。しかし、もしアルヌーがその二枚の絵を...

「駄目だと思っているのなら、だろう！はっきり言いたまえ！ [...]」(91)

芸術家ペルランは、自分の絵をこき下ろしながら、それを他人に高く売りつけるアルヌーに憤るが、フレデリックはこの美術商を擁護する。ここで、最初は臆していた青年の気持ちも、一変したのはなぜだろうか。ペルランの荒々しい、不遜な態度に怒り、反発したからであろうか。しかし、この一節は、そう単純に結論づけることを許さない、不思議な印象を読む者に与える。まず、フレデリックの発した第一声、「ずいぶん大げさだな！」は、原文では、「*Comme vous exagérez!*」という感嘆文であり、それを「おずおずした声」で発することは、可能ではあるにせよ、表現に見合った適切な調子とは言えないだろう。さらに、確固たる自信を得たはずの主人公だが、その後続く自由間接話法での芸術家への反論は、次第にその語勢が弱まり、最後まで言い終わられることはない。表現と、それを発する者の心理との、このような乖離は、ここでフレデリックの心を支配している薄弱な意志を、皮肉な形で露呈させていると考えられる。こうして、彼の確信に満ちた心持ちがあくまで一時的な、一過性のものにすぎないという事実が強調され、浮き彫りにされることになる。だが、たとえ一瞬にせよ、彼が確たる気持ちになったことは明らかである。それが、ペルランの荒っぽい言動への心理的な反発の結果であるなら、もう少し長く、その感情は持続してもよさそうなものではないか。いくら脆弱な意志とはいえ、なぜ、かくも簡単に思いが移ろってしまうのか。

だから、この若者がかりそめの大胆さを見せたのは、決して単なる感情的な反発のみによっては説明されえない。ここでフレデリックの心を揺るぎないものにしたのは、まさに芸術家の「荒っぽい挙動」、彼が断固たる態度でテーブルを叩いたその衝撃そのものなのであり、したがって、そうした外部からの刺激に反応し、あるいはそれを吸収する形で、青年の内部に、類似の断固たる思いが形成されたのではないだろうか。まるで強く叩かれた机の振動が、彼の肉体に、そしてそれを通して彼の内面に直接伝わったかのようである。だが、机の揺れがすぐに静まってゆくように、フレデリックの確たる心

もまた、すぐに萎えてゆく。このように、主人公の感じやすさ、繊細な性質は、通常の限度をはるかに超えており、この高度に鋭敏な感覚こそ、彼を根底から規定している特徴なのである。それ故彼は、自分の感情すら、外的な状況に依存せざるをえない。後に青年が、社交界に入ってゆこうという何度目かの決意をするとき、「今肘をついているテーブルのように、自分の心がかたいと感じ」（164）ずにはおれないのだが、こうした比較がなされるのもまた、彼に固有の感覚と決して無縁ではないはずである⁵。いずれにせよ、先に述べた、彼の心にその始原から刻印されている、振り子のような運動、生のリズムは、現実の人生の反映（移り気）を意味する以上に、彼の感受性の特異さと関係しており、この特質をはるかに告げるものだったのだ。

フレデリックの皮膚は、外界の刺激に極度に敏感であり、周囲のものに過剰に反応しては、彼の内面とその外部とを密接な関係におく、多孔質の膜のようなものだと言えよう。その肌は、望むと望まないに関わらず、周囲から発せられる刺激を、内部に浸透させる。このような存在が、アルヌー夫人の手を握るとき、その皮膚は最高度に感じやすいものとなり、あらん限りの力で、愛する人の精髓のようなものを味わおうとするだろう。

彼女は、フレデリックにも同様に手を差し出した。と、彼は、自分の皮膚の細胞一つ一つに、しみ通るようなものを感じた。（99）

夫人の手と触れあったフレデリックは、まるで皮膚に細かな孔が開いているかのように、女から送られてくる、えもいわれぬものの浸透に身を任せ、これに陶酔する。主人公は、こうして、初めて彼女の家を訪れることができた幸福感を、全身で感じており、また、これから彼女の家を自由に訪問できるという思いもさることながら、とりわけ彼を喜ばせるのは、今後、「彼女の雰囲気の中で生きて」（99）ゆけるという希望である。大切なのは、愛する人の醸し出す雰囲気であり、そこに素肌をさらしつつ、身をもってこの甘美な環境を生きることこそ、フレデリックにとって何よりの快樂なのだ。こうして、愛しい人の存在は、この若者の感覚による変容を被り、彼の皮膚にしみ込んでゆくにふさわしい、微細な物質のようにもなるだろう。

この女性を凝視していると、彼は、あまりに強い香水を使ったときのように、

⁵ このような、フレデリックの一種の物化については、ジャンヌ・ベムなど、幾人かの論者が指摘するところである。Jeanne Bem, *Clefs pour « l'Éducation sentimentale »*, Tübingen, Gunter Narr Verlag, Paris, Éditions Jean-Michel Place, 1981, p. 34.

ぐったりとなるのだった。それは、彼の気質の深みにまで沈み、全てのものの感じ方、新しい生き方のようなものになっていった。(119)

愛する女性をじっと見つめること、それは一般に、眼差しの主体の感情を高める、至福の時を構成するものであろう。だが、フレデリックにとっては、それが自身の愛の進展を脅かす、危険なものにも転じかねない。彼の視覚にとって、アルヌー夫人はあまりに強烈な刺激であるため、まるで「あまりに強い香水を使ったときのように」、この凝視は青年の神経を冒し、肉体の動きを奪ってゆく。ここで見受けられる香水のイメージは、決して単なる比喩におさまるものではない。主人公の特異な視覚によって、夫人の肉体が実際に、香水のような微細な物質に変貌したからこそ、あるいは少なくとも、彼女の身体から、そうした物質が文字通り発散されているからこそ、それは若者の皮膚を浸透し、その「気質」にまで影響を及ぼすことができるのである。こうしてフレデリックの生は、その根底までアルヌー夫人の存在にとらえられ、以後、何を見るにつけても彼女のことを「感じ」、思い出さずにはおれなくなる。つまり、彼女の「雰囲気の中で生きる」という、かつて彼が望んだ状態が、「新しい生き方」として実現されたのだと言えよう。しかし、それは、常に彼女の夢想到に耽るばかりで、未来を切り開いてゆく行動が伴わない、極度に受動的な生き様でしかない。その特別な感覚ゆえに、フレデリックの凝視はここで、夫人への積極的な働きかけを妨げるものになってしまうのである。

身体的再生産

以上のことから分かるように、特殊な感受性を持つフレデリックであるから、彼と世界とが取り結ぶ関係も、非常に独特のものとならざるを得ない。こうして、自らの独善的な芸術論を披瀝する、ペルランの言葉に耳を傾けるときに発揮されるのも、主人公独自の世界の感じ方である。

彼〔ペルラン〕は、フィディヤスやヴィンケルマンについて、滔々と独断的な意見を述べた。周りにある物が、彼の言葉の力を強めていた。すなわち、祈禱台の上に觸躰がおいてあり、トルコの剣や修道士の服があったのだ。フレデリックはその服を羽織った。(86)

青年は、芸術家の住まいにある、周囲の事物が有する力に敏感で、まるでそれが目に見えるかのようなのである。この力が働けば、ペルランの眉唾物の話

すら、フレデリックにとっては説得力を増してしまう。注目すべきは、このとき、彼が、芸術家の言葉の力を強めていると感ずる修道服を、羽織らずにはおれないという事実である。まるで、物の持つ魅力、あるいは磁力のようなものに引かれ、自分もその恩恵に与りたいと思ったかのように。そして、ここに見られるような、ペルランの言葉と事物の力とは、やがて、(それは既に触れた、青年が最初にアルヌー夫妻を訪問する場面であるが、)フレデリックに奇妙な現象を体験させることになる。

そして、彼が自分の熱狂した気持ちを抑えがなくなったとき、ペルランが大声で話した。

「あなたたちの言う忌まわしい現実の話など、私にしないでくれ！現実とはどういう意味ですか。ある者は黒く見、またある者は青く見、大衆というものは愚かしく見る。ミケランジェロほど自然から程遠いものはないが、あれほど力強いものもないのです！外的真実に気を使うことが現代の低劣さを示しているのです。[...]」

フレデリックは、これらの話を聞きながら、アルヌー夫人を見ていた。それらの言葉は、金属が大かまどに落ちるように、心に落ちてゆき、彼の情熱に加わり、愛を作るのだった。(96-97)

この一節は、愛するアルヌー夫人とともにいることの幸福感のために、どんなにつまらぬ話でも、主人公は面白く感じられたという類の、現実にも起こりうる現象が、多少なりとも豊かなイメージをもって描かれている場面ではない。彼の感覚の特異性に着目してきた我々は、この箇所を文字通りに読まねばならないだろう。すなわち、初めて招待された夫人の家で、皆の座談を聞くうちに、フレデリックの心は熱狂してくる。この熱い気持ちは、彼の感覚による内的作用を受け、燃え上がる炎のようになり、そうして聞く芸術家の言葉は、彼にとって金属のような物質以外の何ものでもない。それがいわば原料として、青年の熱せられた「心に落ちてゆき」、そこで溶解し、遂には彼の眼差しの対象である、夫人への愛へと結晶化したのである。こうして、一時「価値の下がった」(92) 感じがしたアルヌー夫人を、フレデリックは再び、また一層愛するようになる。ここでは、彼の周囲のもの、すなわち周りから聞こえてくる言葉の物質性によって愛が生じており、まるでペルランのリアリズム批判の理論(それが真に正当なものかどうかは別として)を、主人公が身をもって実践しているかのようである。こうして、この場面は、我々の実際に生きている現実とは程遠いものになっているのだ。

ところで、既に見たように、以前は、外的な事物がペルランの言葉の力を

強めていた。そうした物の魅惑的な力に引かれたフレデリックが、今やペルランの言葉自体を物のように感じ、その力によって、愛が生み出され、強められているという事実は、さらに興味深い考察へと我々を導く。つまり、この若者は、過去に生きたごと（ここでの場合、かつて感じた物の力）を、無意識のうちに、自らの身体をもって再現しているとは言えないだろうか。そして、こうした再現への嗜好もまた、心の移ろいややすさとともに、主人公のコレージュ時代から見られる特質なのである。

中世の劇を読んだ後は、回想録に手をつけた。フロワッサール、コミーヌ、ピエール・ド・エストワール、プラントームなどである。

これらの読書によって心にもたらされた種々のイメージが、あまりにしつこくつきまとうので、彼はそれらを再現したいと感ずるのだった。彼は、いつか、フランスのウォルター・スコットになるという野心を抱いていた。(60)

若い頃、フレデリックは、ジャン＝ピエール・リシャールならば「大食症⁶」とでも呼ぶであろう食欲さで、本を貪り読む。そのとき彼は、読書の内容を咀嚼、消化、吸収し、自分のものにしてゆくというよりは、書物より得られたイメージにとり憑かれ、それをそのまま紙の上に「再現したい」と思うことしかできない。青年は、小説の起源からして既に、自分が受け取ったものを、再び生みだそうとせずにはおれないという、不思議な性質を付与されているのである。こうした、いわば単純な模倣、反復によって、新しい作品が生産されるはずもなく、彼はだから、「フランスのウォルター・スコット」どころか、一編の小説すら書きあげることはないだろう。

フレデリックのこのような再現への偏向が、彼の特異な感覚と緊密に結びついたときに出来る不思議な現象は、既に幾度か言及した場面、すなわち、アルヌー夫妻の家に初めて招待された場面の直後にも見ることができる。

彼は、もう環境も、空間も、何も意識していなかった。そして、地面を踵で蹴り、ステッキで店の錠戸を叩きながら、ただずっとひたすら、どこへともなく、夢中になって、引きずられて、歩いてゆくのがあった。湿った空気が彼を包んだ。気付くと、河岸にいた。

街灯が果てしなく、まっすぐ二列に灯っていて、真っ赤な長い焰が水の深みに揺らめいていた。[...]

彼は、ボン・ヌフ橋の真ん中で立ち止まっていた。そして、帽子を脱ぎ、胸

⁶ Jean-Pierre Richard, « La création de la forme chez Flaubert », in *Littérature et Sensation : Stendhal Flaubert*, Seuil, coll. « Points », 1990, pp. 139-141.

元を広げて、空気を吸い込むのだった。その間、自分の奥底から、眼下の波の動きのように、何か滾々として尽きないもの、全身を陶然とさせる溢れ出る愛情が、こみ上げてくるのを感じていた。教会の大時計が、ゆっくりと一時をうったが、それはさながら、彼を呼んでいる声のようだった。

その時彼は、人を一段高い世界に運ぶように思える、あの魂の戦慄の一つにとらえられた。途方もない能力が、そのめざす対象は分からなかったが、彼に生じていた。[...]

顔が鏡に映っていた。彼は自分を美しいと思った。— それで、しばしの間、自分の顔にじっと見入った。(99-100)

夫人の家を後にしたフレデリックは、彼女と握手できた喜びや、彼女の雰囲気生きることができるといふ希望に胸満ち、何かに「引きずられ」るように歩いてゆく。次いで、周囲の「空間」が意識から消え去るほど、夢見心地だった彼の皮膚に、湿った空気が突如まとわりつく。そして、セーヌ河から送られてくるその空気を、思い切り吸い込んだとき、まるで河の「波の動き」を模倣するかのように、彼の内面に愛情の波がこみ上げてくるのである。それはまた、この直前に夫人の家で、ペルランの言葉を体内に取り入れて愛を作り出した、主人公の身体作用の幸福な反芻でもあろう。彼をうっとりさせ、自分の顔を美しく花咲かせる、心情のこうした豊かな泉に、彼の内的感覚までもが変容し、わずかな時間が永遠の時へと引き延ばされるかのようである⁷。だが、こうしたフレデリックの幸せは、真に永続するものなのだろうか。彼は自分が高次の世界に生まれ変わったと思うが、それはあくまでそう思っただけのことで、真に生まれ変わった訳ではないのではないか⁸。実際、内から漲る力、身に備わったかに見える何らかの能力も、彼にはその向かうべき対象、使うべき用途が分からない。彼がここで画家になろうと決意したのも、絵を描くことそのものが目的なのではなく、ただ「アルヌー夫人に近づく」(100) ためでしかないのである。フレデリックの幸福感は、あくまで周囲のもの（ここでは河の運ぶ空気や、波の動き）の作用によって生じたの

⁷ 時計の一打ちが、ゆっくりであるはずがないと、この箇所を訂正をマクシム・デュ・カンがフロベールに勧めた。小説を校正する際、この友人の意見を尊重した作者ではあったが、上の要求は退けることになる。それはやはり、ここで小説家が、真実らしさよりも、フレデリック独自の内的感覚の表現こそを重視したからではないか。なお、デュ・カンの『感情教育』への意見に関しては、以下のものを参照のこと。Pierre-Georges Castex, *Flaubert : L'Éducation sentimentale*, SEDES, 1989, pp. 211-217.

⁸ この引用箇所暗示されている皮肉な調子に関しては、以下の論文で、ミシェル・レイモンが簡潔に指摘している。Michel Raymond, « Le réalisme subjectif dans *L'Éducation sentimentale* », in *Travail de Flaubert*, Seuil, coll. « Points », 1983, p. 102.

であり、その外的なものを身体が模倣し、再現する形で、青年の内部に愛の泉が生み出されたにすぎない。したがって、こうした幸福は、わずかな状況の変化によってもすぐに消え去ってしまうような、極めて脆い感情でしかないだろう。実際、この後フレデリックは、少しも進展しない恋に失望するばかりはない。

身体的想起と再現

自分の味わった幸福が続かず、儚く消え去ったとき、人はかつてのその充実した時間に執着し、これを懐かしむ。追憶と呼ばれるこうした行為は、手に入れたはずの幸せが、すぐに逃げ去ってゆくフレデリックの生においては特に、頻繁に繰り返されるものとなるだろう。しかし、通常の追想と違って、彼の特別な感覚はここでも、自身の思い出を不思議な色合いに染め上げることになる。

その歌詞は、フレデリックに、あの船の外輪の間で、ぼろを着た男がうたっていた歌を思い出させた。彼の眼は、無意識のうちに、自分の前に広がっている、女の着物の裾に引きつけられていた。歌の節の終わりごとに、長い休止があった。—そして、木々の間にそよぐ風は、波の音に似ているのだった。(125)

なかなか報われないアルヌー夫人への想いに絶望し、悲しみに沈む主人公は、ダンスホールで遊んでいてもなかなか楽しめない。そのとき、耳に聞こえる歌は、夫人と最初に出会った船上での出来事を彼に思い出させる。かつて青年は、船の甲板の腰掛に座っている夫人の周りに、「いくつもの襲いになって広が」(51)る着物に見入らずにはおれなかった。その印象があまりにも鮮烈であったため、今、彼の眼は、当時の動きを、「無意識のうちに」繰り返さずにはおれない。そして、彼の感覚そのものが、まるで過ぎ去った幸福を覚えているがごとくにこれを懐かしみ、その時に聞こえていた河の波の音へと、木の葉のざわめきを変容させるのである。追憶とは、過去に生きた出来事を、自分の脳裡のうちに再現、反復することであろう。だが、ここで過去の体験を回想しているのは、フレデリックの精神だけではない。それに加えて、彼の身体もまた、その特異な感覚と再現への嗜好とによって、かつての至福のひと時を想起しているのである。こうして、過去に生きられた舞台が青年の周囲に現出する。まさに彼は、懐かしい過去を、現在のこの時に再び作りだし、それを肌で感じようしているのである。身体による過去のこのような再

生産は、ダンスホールからの帰り道、さらに変奏されてゆく。

気がつくとは彼は、コンコルド橋の上にいる。

その時、前の冬のあの夜を彼は思い出した。— あの時は、彼女の家からの初めての帰り道、立ち止まらずにはおれなかったが、それほど、希望にしみつけられて、胸の動悸が速くなっていたのだった。今ではすべての希望が消えてしまった！

月の面を、暗い雲が走ってゆく。彼は、天空の広大さ、人生の惨めさ、一切の虚無を思いつつ、その月を眺めた。日が射した。歯がかちかち鳴っていた。そして、半ばぐったりとまどろみ、霧に濡れ、涙にくれながら、なぜひと思いに命を絶ててしまわないのか、と心に問うた。ひとつ身動きすれば、もうそれでいいのだ！額の重さが彼を引きずり、自分の死体が水の上に漂うのが見えるのだった。フレデリックは、前に身を傾けた。欄干の幅が少し広く、それを乗り越えようとしなかったのは、ただ疲れていたからであった。(129)

悲しみに打ちひしがれ、街を彷徨うフレデリックは、いつの間にかコンコルド橋の上にいる。その時、かつて初めてアルヌー夫人の家に招待された晩餐会の後、今と同じようにボン・ヌフ橋の上に立ち止まったことを、彼は思い出さずにおれない。二つの場面の反復構造は、多くの論者の指摘するとおり、明らかであろう⁹。しかし、橋の上に立つという状況は類似しているが、フレデリックの感情は、以前とは対照的に、「すべての希望が消え」さり、苦渋に満ちている。彼の眼は、そのうち自然と空の方に向かう。まるで、「環境も、空間も、何も」意識できなかつたほどのかつての恍惚感を、無意識のうちに懐かしむかのように。しかし、見出されるのは、そうした周囲の事物の官能的な消滅とはかけ離れた、広大な世界一切の「虚無」でしかない。この無は、かつての陶酔の劣化した反復以外の何ものでもないであろう。またここで、「半ばぐったりとまどろみ」、意識を失いつつある青年とは、「どこへともなく、夢中になって」歩いた、過去の忘我の境地を、虚しく再び生きようとしている者の、あわれな姿にほかならない。そして、さらには、ここで彼がとられる自殺願望も、単なる絶望のみから生じたものではないだろう。なぜなら、フレデリックは昔、希望に燃え、何かに「引きずられ」るようにして歩いていたが、まるでいまだその運動が持続し、彼の身の上に働いてい

⁹ 例えば、ジョエル・グレースは、霧や物音といった、状況の類似のほか、かつては鏡に、ここでは死体として水の上に、自分の姿を映すという、フレデリックの行動の反復なども指摘している。Joëlle Gleise, « Le défaut de ligne droite », in *Littérature*, n° 15, octobre 1974, p. 84.

るかのように、彼は「額の重さ」に「引きず」られ、自殺しようとしているからである。青年の肉体そのものが、過去を想起し、再現しようとしていることが見てとれよう¹⁰。フレデリックの独特な身体感覚と、それに密接に関わる再生産への傾向とは、記憶にまで深い影響を及ぼすほど、その生を根底から規定し、統御しているのである。よって、フレデリックが時々感ずる束の間の幸福にさえ、過去の影は色濃く投影されてしまうだろう。悲しみに沈む青年を立ち直らせる、サン・クルーの別荘で開かれた、アルヌー夫人の誕生会の場面がその例である。

彼らは、周りで話されていることについて会話をした。彼女は雄弁家を褒め称えるのだった。彼はと言えば、作家の榮譽の方を好んでいた。だけど、と彼女は言葉を継いだ、自分でじかに大勢の人たちを感動させ、自分の心のあらゆる感情が、彼らの心に伝わるのを見れば、もっと強い喜びを感じるに違いない。[...]彼女は、恋から生じた不幸には同情したが、偽善的な卑劣さには憤慨するのだった。そして、こうしたまっすぐな心は、彼女の顔の端正な美しさで、あまりに結びついていたので、まるでその心は、この顔の整った美しさから生じているように思われた。

彼女は、時々、しばしの間彼を見つめながら微笑んだ。それで、彼は、水底にまで沈んでゆく豊かな太陽光線のように、彼女の眼差しが自分の魂にしみ透ってゆくのを感じるのだった。彼は、下心もなく、見返りを期待する気持ちもなく、一心に彼女を愛していた。そして、感謝の心による衝動にも似た、言葉を詰まらせるそうした熱情にとらわれて、彼は相手の額を、口づけの雨で覆いたかった。その間、ある心の息吹が、彼をまるで自分自身の外へと運び去るように、高揚させるのだった。それは、自己犠牲の気持ち、即座に献身したいという欲求であって、満たしえないだけに、一層熾烈なものだった。(136-137)

愛する人の言葉は、時として、人の人生を変えてしまうほどの、決定的な影響力を持つことがあるのかもしれない。好きな人に気に入られたいというただそれだけの気持ちから、相手の希望を受け入れずにはおれないのである。だが、こうした、実人生でもありうるような、ごく普通の体験ですら、フレデリックによって生きられれば、それが特異な経験へと変容してしまう場合

¹⁰ アンドレ・ヴィアルは、橋の欄干によって妨げられるフレデリックの自殺が、バルザックの『谷間のゆり』における、フェリックスの体験と類似していることを指摘した。そうすると、この一節は、『感情教育』外部のテキストの再生産というテーマへと、我々を誘う可能性をも秘めていることになるだろう。André Vial, « Flaubert, émule et disciple émancipé de Balzac : L'Éducation sentimentale », in *Revue d'histoire littéraire de la France*, juillet-septembre 1948, p. 244.

もある。ここで彼は作家に心が傾くが、アルヌー夫人は、自分の心を自在に大衆に伝え、彼らを動かすことのできる弁論家の方を好む。この夫人の言葉に影響されるような形で、青年はこの後、雄弁家を目指そうとするのだが（無論、その夢が果たされることはない）、愛する女性の影響力はそれだけにはとどまらない。すなわち、この一節において、若者が夫人の微笑を身体全体で受けとめるとき、彼女の眼差しは、彼の皮膚をそのまま浸透してゆく。まるで、かつてポン・ヌフ橋から見た、「水の深みに揺らめ」く、街灯の「真っ赤な長い焰」の一つが、彼の体内で時の流れを経て変容されつつ、蘇ったかのように、身体にしみ込む夫人の眼差しは、水底にまで差し込んでくる太陽光線のようなのである。そして、これはまた、ペルランの言葉がフレデリックの心に、金属のように「落ちて」いったこと、あるいは、彼の甘美な凝視によって、夫人が気化し、まるで散りばめられた香水のように、彼の気質の深いところまで「沈」んでいったことなど、昔身体に生じた内的下降運動の反復でもあろう。そうしたときに彼の魂が感ずる、腹蔵なき純粋な愛こそ、まさに、夫人の眼差しを内部に取り入れることによって伝えられたもの、つまり、彼女の「まっすぐな心」の反映ではないか。だから、ここで他人に自分の心情を吹き込み、それを動かす雄弁家になっているのは、フレデリックではなく、アルヌー夫人の方なのである。彼の特異な感覚は、愛する人の望みを、自らの人生において実現することを許さない。弁論家になればという夫人の言葉、暗黙の要請は、彼の身体器官の作用を介して、夫人自身の身の上に、振れた形で具現化されてしまったのである。

太陽光線のような夫人の眼差しの熱によって、温められたフレデリックの心の泉は、充溢感にみなぎり、そのお返しに彼女の額に降り注ぐ、接吻の「雨」へと変わろうとする。そして、それに伴う、心に吹く風のような上昇運動は、ポン・ヌフ橋でのときと同じように、フレデリックを「自分自身の外へと運び去る」ほど高揚させ、また、彼の心を強烈な自己奉仕の願望へと向かわせるのである。だが、こうした施しへの欲求の中にもまた、過去の痕跡が見受けられる。すなわち、小説冒頭にてフレデリックは、夫人との運命的な出会いによる、「ほとんど宗教的な心の動き」（52）に促され、船上で歌をうたったぼろを着た男に、ルイ金貨を施していたのだった。

愛情の間歇

このように、周囲の状況の作用を受けながら、過去に生きた体験を繰り返

さずにはおれない主人公は、その体内が水に溢れ¹¹、内的な風が心に吹き上がるという、先に見たイメージからも分かるように、自然の一部、あるいは、植物のような存在であるのかもしれない。

子供たちの笑い声が、絶え間ない噴水の音とともに、聞こえていた。

フレデリックは、さっきまで、デローリエの味わった苦痛のために、困惑を感じていたのだった。しかし、血管をめぐる酒の影響で、半ばうとうと、麻痺した心地になり、また、光を顔いっぱいを受けているため、官能的なまでに茫然自失となった底なしの幸福感しか、もはや感じていなかった。— 熱と湿りに飽満した植物のように。(167)

フレデリックの肌は、「植物のように」、周囲の環境と親密な関係を取り結ぶ。噴水の方から来る、湿った空気を彼の皮膚は吸収し、その摂取された水分は、酒とともに彼の血管を循環する。そして、燦々と照りつける太陽の光は、かつて体験した、水中に射しこむ日光のようなアルヌー夫人の眼差しのよう、水分で充満した若者の体内へとしみ入るのである。彼の内的環境は、水に潤され、熱に温められ、その結果、陶然とした忘我の境地が生みだされている。外的な環境の影響はここで決定的であり、その力は彼に、友人デローリエの苦悩への同情心をも、いとも簡単に忘れさせてしまうほどである。つまり、フレデリックが抱く友情の背後に蠢く偽善的なものが、ここでは単なる心理描写によってではなく、外的世界の働きかけによって、白日の下にさらされているのだ。心理の動きまでもが、周囲の環境にすぐに左右されてしまうという、主人公の特異な体質。この植物のような身体に、十分な滋養が与えられ、必要な環境が整えば、彼は活力に漲り、愛の幸福感に満ちてきた。しかし、逆に、それらのものが奪われれば、彼は悲しみに萎れ、絶望感に打ちひしがれてきたのである。周りの世界の動静に従って起こる、このような心情の間歇¹²こそ、フレデリックの生を覆う本質のリズム、すなわち反復であり、それは彼の人生を一貫して深く蝕んでいるのである。

実際、これまでの考察からも推測できるように、フレデリックのアルヌー夫人に対する恋慕は、常に情熱に満ち溢れているような、恒常的なものでは

¹¹ 『感情教育』における、水のイメージと、その意味作用については、以下の論文を参照のこと。Bernard Masson, « L'eau et les rêves dans *L'Éducation sentimentale* », in *Europe*, n° 485-487, septembre-novembre 1969.

¹² フロベールは、小説執筆の初期段階から既に、主人公の愛の「間歇」的な性格を構想していたことが、シナリオ(Folio 38 recto)によって窺える。

ない。それは、ちょっとしたきっかけですぐに、あるいは揺らぎ、あるいは消えてしまうことは、よく知られるとおりである。例えば、小説第一部、三章で、ある晩、彼は劇場で喪章をつけたアルヌーを見かけ、夫人が死んでしまったのではないかという危惧の念に駆られる。翌日、夫人が元気であることを知らされたフレデリックだが、その後、故郷に帰ったりしているうちに、「アルヌー夫人に対する大切な恋は消え始め」(74) てしまうのである。同様に、第一部の終わりにて、やはり故郷に帰った主人公は、「田舎に慣れ、そこに溶けこんで」(150) ゆき、その愛は「喪の穏やかさ」(150) を帯び、夫人も「死んだ人」(151) のように彼には思えてくる。こうして、植物のような存在にとっての環境の変化は、重要で決定的な意味を持ち、その感情の波を統御してゆく。

フレデリックは、痙攣するばかりの喜びを期待していたのだった。—しかし、情熱は場所が変わると萎れるものである。それで、かつて親交を結んでいた環境に、アルヌー夫人をもはや見出せないため、彼女は何かを失ったように、どこもなく品位を落としてしまったように、つまりは同じ人でないように彼には思われるのだった。(163)

田舎に長いこと滞在している間に、住居が変わってしまっていたアルヌー夫人を訪ねたとき、フレデリックは、何よりもまず、その環境の変化に敏感に反応せずにはおれない。かつて彼は、夫人の「雰囲気」に生きることを望んだように、愛する人とその周囲とは、彼の意識にとって不可分の関係にある。青年の愛は、それが育まれる場所、世界と切っても切り離せないものなのである。時には、夫人の周囲の事物が、「彼の心をとらえ、彼の愛情を募らせ」(106) ることができるのも、そのためである。だが、ここで、これまで親しんできた外的環境と夫人との関係が、ふいに絶たれたとき、存在の内的環境はその変化に対応できず、深い動揺を被ってしまう。つまり、場所が違えば夫人の同一性が揺らいでしまい、フレデリックはかつてのように、彼女を美しいとは思えないのである。こうして彼の愛情は、まるで水分や日光の乏しい環境に適應できない植物のように、「萎れ」、枯れてゆくしかない。しかし、そうした周囲の世界の変化にもやがては慣れ、適應してゆく植物のように、フレデリックの感情もまた、その活力を甦らせるだろう。

そして、彼女の瞳の奥には、無限の優しみがあつた。彼は、かつてないほど強い、大きな愛に再びとらえられた。つまり、それは、彼をしびれさせる凝視であつたが、彼はそれを振り払った。(191-192)

アルヌー夫人の新居を再度訪れたとき、フレデリックは激しい愛情の迸りを感じる。彼の心には愛の泉が再び湧きあがり、その甘美な水は全身をとろけさすかに見える。だが、主人公のこうした感情の高揚も、あくまで心情の間歇、愛情の反復のリズムという、彼の生を律する法則に則って生じたものであり、新たな愛の段階に移行したとは決して言えないだろう。確かに一見、青年の抱く「かつてない」強い愛は、彼の人生の、新しい局面の始まりを告げるものとも思える。しかし、「再びとらえられ」という表現が、その劇的効果を密かに弱めていることに着目せねばならない。ここでもまた、過去は、現在の幸福感にその影を投げかけているのである。事実、フレデリックをこのようにしびれさせる凝視を、我々は既に見たことがあるのではないか。つまり、強い香水のように彼をぐったりさせた、あの凝視である。また、ここで夫人の瞳に滲えられる優しさも、サン・クルーでの誕生会にて、フレデリックに微笑みながら投げかけられた、あの眼差しを我々に思い起こさせる。実際、引用した一節は、彼が、その誕生会のことを、夫人に思い出させた直後に位置するものなのである。さらには、この場面の後、彼は、「施し」(192)をしたいという気持ちに駆られるが、これも既に述べた、小説冒頭の場面などの繰り返しのよう思える。以上のことから考えると、ここで、フレデリックが新たな世界に順応したと言うよりは、彼の特異な感覚が新たな環境を変質させ、過去に生きた状況に、彼を戻そうとしていると言った方が、より適切なかもしれない。

夢と反復

フレデリックの特殊な感受性は、絶えず過去を現在に投影させる。このように反復される過去にあたるものが、夢で見た出来事である場合、人はそれを正夢と呼ぶかもしれない。だが、そうした体験も、フレデリックによって生きられるとき、単に正夢と言うだけでは不十分な、豊かで興味深い現象になる。それはどのようにしてか。以下、その過程を見てゆきたい。

遺産相続の報せを受けた彼は、小説第二部の冒頭にて、故郷から意気揚々とパリに帰るとき、まるで馬車の揺れに促されるように、眠りにおちいる。

だが、少しずつ、希望や思い出、ノジャン、ショワズール通り、アルヌー夫人、母親、すべてが混じり合うのだった。(156)

意識が次第に朦朧となる中、フレデリックは、アルヌー夫人に会えるという未来への期待や、故郷ノジャンで過ごした思い出など、すべてが渾然となるのを感じる。これは、単に、彼がうとうと眠りに落ちていったという事実のみを意味するのではない。なぜなら、この眠りにおける混乱は、この後、不思議な形で繰り返されるからである。

それから、彼は、後頭部に耐えがたい痛みを覚えながら、寝床に入った。そして、のどの渇きを癒すために、水差し一杯の水を飲んだ。

別な渇きが生じていた。それは、女、贅沢、そして、パリの生活が与える一切のものへの渇きだった。彼は、船から降りた人のように、頭が少しぼおっとなるのを感じていた。そして、うとうとし始める時の幻覚のうちに、市場の女の肩、荷揚げ人夫の女の腰、ポーランド女のふくらはぎ、未開人の女の髪などが、絶えず往復するのが見えるのだった。次に、舞踏会では見なかった、二つの大きな黒い眼が現れた。そして、蝶のように軽やかで、松明のように熱烈な、それらの眼は、行ったり来たり、震え、天井近くの壁にある装飾にまで上がり、彼の口もとまで下りてくるのだった。フレデリックは、その眼が誰のだか見分けようとするが、なかなかできないでいた。だが、既に夢の境であった。自分が、アルヌーの側に、辻馬車の轆につけられて、マレシヤールが自分に馬乗りになり、金の拍車で腹を裂いているように、彼には思えるのだった。(183-184)

田舎からパリに帰ったフレデリックは、既に見たように、引越し後のアルヌー夫人に幻滅したが、そんなとき、アルヌーから、その愛人ロザネット(マレシヤール)の家の舞踏会に誘われる。この場面は、そこから帰宅した後のことである。故郷からパリに向かう馬車の中で、主人公は、セヌ河から発散するひんやりとしたもの、彼には「恋の芳香と知的な靈氣」(157)を含んでいると思われるパリの空気を、思い切り吸いこみ、味わっていた。また、ロザネットの館で彼は、「まるであたり一面に広がる接吻のように循環している、女のかすかな香り」(172)を吸収することができた。まるで、その味を思い出したかのように、青年は女など、パリの生活がもたらさずはずのもの一切を渴望せずにおれない。こうした渇きは、次に、ロザネットの家で彼が見た女たちへと向けられる。そこでは、ワルツの「次第に加速し規則的になる、めくるめく旋回運動」が、彼の頭に、「一種の酔い心地」(175)を伝え、そのために、市場の者や荷揚げ人夫に仮装して踊る女たちと、それとは「別のイメージ」(175)、つまり様々な風景とが結びつき、重なり合うという、幻覚を見させていた。それがここでは、眠気によって引き起こされる幻視によって、舞踏会で、「それぞれの美しさの種類に特有の刺激」(175)を放ってい

た、それらの女たちの、交錯する運動が、フレデリックの記憶に甦るのである。さらに、女の肉体の断片が入り交じる、ダンスの旋回にも似たこの動きは、舞踏会には見当たらなかつた。しかし、誰のものなのかフレデリックには分からない、二つの眼の運動を誘発する。だが、この眼こそ、パリへ向かう馬車の中では、燦然と輝いて見え、「彼にとっては太陽とも思われた二つの眼」(157)、すなわち、アルヌー夫人の眼なのである。女性一般への欲望が、舞踏会のなまめかしい思い出を想起させ、それは、パリに戻るときの主人公の希望であった、夫人との恋を彼に忘れさせようとする。そして、最後に夢の中では、舞踏会でダンスの旋回をするたびに、その「金の拍車の端で、フレデリックを危うくとらえそう」(176)だった、ロザネットに彼は馬乗りになれる。遺産相続が決まったとき、彼は「幻覚のような鮮やかさ」(151)で、アルヌー夫人と「四輪馬車」(151)に乗る日々の連続を期待していた。しかし、今やその幻覚は、別の幻覚の作用によって変質し、かつての希望に、ロザネットの強烈な思い出が、奇妙な仕方では混じり合う。青年は、自分が馬車に乗るかわりに、それに繋がれた馬になり、そして、その馬車に乗る人も夫人ではなく、ロザネットであるような、そういう夢をここで見ているのである。

このフレデリックの夢は、以後、彼の人生を決定的に支配することになる。実際、アルヌー夫人とロザネットの家を頻繁に訪ねるうちに、青年の二人への愛は「次第に混じり合って」(202) ゆく。しかもこうした混同は、「両者の住居の類似」(202) によるものであると、環境の、愛への影響がここでも強調される。その結果、彼は、二人の女の区別がつかなくなる時すらある。

「どうして君〔ロザネット〕は、僕を苦しめるんだい？」彼は、アルヌー夫人のことを思いながら言った。(273)

こうしたフレデリックの混乱、愛の混同は、ワルツを踊りながら回転する女性たちの幻影が入り交じる中、アルヌー夫人にとって代わるロザネットという、彼の見た夢の実現、つまりはその再現へと着実に向かってゆく。こうした現象は、青年の意識的な行為ではなく、あくまで、外からの働きかけによって引き起こされるものであり、外的条件に動かされずにはおれない、彼の特殊な感覚のなさしめるものである。この影響力をはねのけることがフレデリックに可能なのだろうか。

オートウイユの別荘にて、夫人と幸せな逢瀬を楽しんだフレデリックは、その後自分の愛を完全なものにしようと思い、パリの通りを二人きりで歩き

たいと夫人に申し出る。

それで、彼は、一度、冬の黄昏時、霧のかかった日に、二人いっしょに外出したことを彼女に思い出させた。今はもう、それはすべて遠い昔のことだ！彼女に恐れもなく、自分に下心もなく、周りに邪魔な人もいないで、みんなの前に、自分の腕に寄りそって出て行って、どうしていけないのですか？(343-344)

フレデリック自らの意志で、かつての幸福な体験を繰り返そうとすると、それが外からの作用によって動かされていないだけに、同じ反復という現象を目指しながらもうまくゆかないだろう。実際、ここでの約束は、アルヌー夫人の子供が突然病気になったために、実現されることはないのである。この場合、環境と同じくらい重要な外的要因かもしれない、偶然という要素が、若者の自発的行為の完遂を妨げたことになるであろう¹³。いずれにせよ、フレデリックの運命が、自らの意志ではなく、外的条件に委ねられているということは、間違いない。約束を破られた彼は、「若さからくる反発」(352)の思いに駆られて、ロザネットのもとに行き、夫人の為に用意していた部屋に、彼女を身代わりに連れ込む。結果、あと一息で恋人となるはずだった夫人の代わりに、ロザネットが青年の愛人となるほかはないだろう。だが、彼のこの反発心さえ、かつて、ロザネットの家での舞踏会の際に、「彼の気に入るようにしつらえられた環境」(172)に居ることにより突然心に起こった、「若さの反抗」(172)と同じ衝動の反復にすぎない。こうして主人公の見た夢は、彼の身体によって忠実に再現され、現実のものとなったのである。フレデリックにとって、その運命の狂いの最たるものの一つであろう、ロザネットによる夫人の代用という出来事も、つまるところ、彼の感覚の特異性がその原因であったのだ。

結語

フレデリックは、彼の生きる世界とあまりに深く関係を持ってしまうために、その世界に生起する様々な外的条件に、常に左右されずにはおれない。こうした、あまりに敏感すぎる彼の感覚は、その生の基本的リズムである反

¹³ この小説における、偶然の果たす役割の重要性については、以下の論文を参照のこと。Jean Bruneau, « Le rôle du hasard dans *L'Éducation sentimentale* », in *Europe*, n° 485-487, septembre-novembre 1969.

復という現象を、自身の身の上に引き起こす。だが、ともすれば退屈な単調さに陥りかねないこの運動を、ダイナミックなものにしているのもまた、主人公のこの特異な感覚にほかならないことは、身体全体を用いてなされる、過去に生きた体験の再現などの事実を見れば明らかである。その時々によって様々な展開を見せる、この変容する反復こそ、『感情教育』の魅力の一つであろう。

また、フレデリックの受動性については、既に多くの論者が指摘するところである。しかし、そうした彼の意志の弱さが、単なる心理的、性格的な問題には還元されえないものであることも、明らかになったかと思う。実際、彼は常に受け身な姿勢でいる訳ではなく、時には明確な意志をもって行動に移る、あるいは移そうとする場合もあるのである。しかし、そうした行為の達成をも妨げる、何らかの外的な条件の影響を、常に被ってしまわざるをえないが故に、フレデリックは徹底して受動的なのであり、その意味でこれは、完全に統御された受動性なのだと言えよう。だが、彼の受動性を支配する外的要因に関しては、本論では環境とそこに存する事物などを扱ったばかりで、他の要素を詳しく論ずることができなかつた。そうした分析を試みることは、フレデリックの愛の諸相についての、さらなる詳細な探求とともに、これからの課題としたい。